

河川環境管理財団ニュース

News Letter from Foundation of River & Watershed Environment Management



【第8回 世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 北海道 2010 大会】の体験活動

写真は、平成 22 年 8 月 2 日(月)～4 日(水)の 3 日間、北海道洞爺湖町の「北海道洞爺少年自然の家(ネイバル洞爺)」で開催した「世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 北海道 2010」の体験活動 (E ボート、カヤック、カナディアンカヌー) の参加者。この大会では、全国から選抜された中学生・高校生がファシリテーター (大学生) と一緒に、「水による災害 (洪水や津波、土砂災害等)」、「安全な川での体験活動」、「河川や水環境の保全・復元・再生」、「生活 (暮らし・産業) に必要な水」、「水の歴史・文化」の分科会に別れ、情報や意見交換を行い最終日に成果を発表した。

詳細は、子どもの水辺サポートセンターのホームページを参照。

http://www.mizube-support-center.org/cwwf-f/2010/hokkaido2010_report.pdf

ニュースの項目

【巻頭言】…………… P2

国土交通省 河川環境課長 小池 剛

【特集 河川的环境と防災教育の取り組み】…………… P3

【報告事項 1 調査研究等】…………… P6

1. 「河川環境研究会」の開催
2. 「第 4 回アドバイザー委員会」の開催
3. 河川セミナー「河川の土砂流出と底生生物に関する懇話会」の開催
4. 「河川塾」報告～第 6 期塾生の旅立ち～
5. 小冊子「川の水：第 14 号」の発行

【報告事項 2 河川環境学習関係】…………… P8

1. 全国水難事故マップのデータ追加更新と携帯電話モバイル版の運用開始
2. 「平成 22 年度川に学ぶ全国事例発表会」の開催
3. 「第 2 回プロジェクト WET・ワイルド

全国大会」の開催

4. 「第 10 回プロジェクト WET ファシリテーター講習会」の開催
5. DVD「安全な川遊びのために」の制作・配布
6. 体験施設における河川環境教育への取り組み

【公園・施設管理コーナー】…………… P11

1. 多摩川・諏訪野球場をリニューアルオープン～より快適な利用を～
2. 平成 22 年度河川美化・緑化事業 (植樹等) の実施
3. 「第 1 回 なにわ淀川ハーフマラソン大会」(大阪) の開催

【河川整備基金コーナー】…………… P12

1. 助成事業 23 年度申請を振り返って
2. 河川技術研修会開催報告について

【出版案内】…………… P14

1. 「川を活かした体験型学習プログラム」の発行
2. 「水辺の安全ハンドブック (改訂版)」の発行

【お知らせ・募集】…………… P14

1. プロジェクト WET エducーター養成講習会
2. 川の指導者 (RAC リーダー) 養成講習会
3. 河川美化・緑化助成事業 (植樹等) - 募集 -
4. 「第 9 回 (財) 河川環境管理財団 研究発表会」の開催
5. 「第 9 回世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 東京 2011」の開催
6. 「第 11 回川に学ぶ体験活動全国大会 in 鶴見川流域」の開催

巻頭言

東日本大震災への対応

東日本大震災で被災されました皆様、ならびに関係者の皆様には、心よりお見舞い申し上げます。

「言い表せる言葉が見つからない。」

3月11日に発生した東日本大震災から、2週間が過ぎた3月末、災害瓦礫の状況を把握するため、関係各省からなる現地調査団の一員として、釜石市、大槌町を調査した際の正直な思いです。

その時は、三陸地方にアプローチできるルートも限られていて、早朝に羽田空港を出発し、青森空港から東北道を南下、花巻経由で釜石市に入る経路を通りました。降り立った青森空港は、雪が深く、春はまだまだ遠いとの感を強くしました。高速道路から見える景色も色彩の乏しい冬景色で、これから向かう現地の状況を想うと、マイクロバスの中は、皆、無口で、重い空気が占めていました。

連日、現地の状況を伝える画像を見て、覚悟をもって現地に赴いたつもりではありましたが、それを遙かに超える現実を目にすることになりました。1階、2階が鉄骨の柱だけが残っている建物、火災の痕と思われる黒く染まった壁、家の形もわからない倒壊した多数の木造家屋、それらが道路の両脇に山をなしている瓦礫の固まり。行方不明者を捜索している警察、消防、自衛隊の車両と隊員。砂漠のように何もなければ、町が無くなってしまっているのに、少し前までは、そこで人々が普通に暮らしていたことを物語っている様々な痕跡が残っていることが、なおさら大きなショックを受ける光景でした。

大槌町の担当の方のお話を聞く機会がありました。自分の仲間も津波で失い、毎日、町民の皆さんから

の要望に対応するため家にも帰れない日々が続いている、体力的には大変だけれど、仕事に追われていた方が気持ちの上では楽、ギリギリの状況の中、自分たちの職務に没頭したいとの思いに触れました。周りを見回して見ると、これだけのダメージを受けている町の中で、その光景を見て立ち尽くしている人や悲嘆にくれている人は見あたらず、何かに向かい決心したように黙々と歩いている人々の姿が見えてきました。地に根が張っている逞しさを感じました。

今回の地震に伴い、被災した地域では、地盤沈下によりゼロメートル以下の地域が拡大し、海岸や河川堤防などが被災していることから、高潮、洪水に対する災害リスクが震災前より高まっています。これらの被災した施設については、河川については梅雨期までに、海岸については、台風期までに応急対策を実施し、二次災害の防止を目指しています。さらに、その後の本格的な復旧・復興に向けて、地域の皆さんが望む将来ビジョンについて、国と地域が共有しながら、計画的に進めていくこととなります。

河川環境も、大きな影響を受けています。この災害を乗り越えて、新しい地域づくりを目指す時、よりよい水環境を織り込むことで、地域の魅力を増進する、たくましさを知恵が求められています。是非、皆様のご支援とご協力をよろしくお願いいたします。



国土交通省 河川環境課長
こいけ つよし
小池 剛

特集

「河川環境と防災教育の取り組み」

1. はじめに

私たちの身近に存在する川は、多様で豊かな自然環境を有する存在であり、さらに、人間生活としての営み、社会・経済活動を行っていく上で必要不可欠な水を確保する上で重要な存在でもあります。一方、恵みの雨もひとたび大雨になれば川は洪水となって沿川住民を襲い甚大な被害を及ぼし、大切な生命や財産に多大な影響を与えます。

未曾有の大災害となった東日本大震災は、私たちが英知を集めて策定した「想定」をはるかに超える規模の津波が発生したことに起因したものです。自然の猛威は私たちの予想をいとも簡単に上回ってしまうことを実感することとなりました。

それでは、あるレベルの計画に基づいた洪水防御のための治水対策などは無力なのでしょうか。今回の震災で児童・生徒が逃げ延び「釜石の奇跡」と言われた釜石東中学校と鶴住居小学校の例をどう教訓として活かせばよいのでしょうか。

河川においても、河川環境教育の取り組みの中で水難事故防止の一環として、川に内在するさまざまな危険を伝える中で、過去の洪水災害の歴史や治水対策についても取り上げてきました。

しかし、この度の東日本大震災の経験は、これまでの河川環境・防災教育に、想定外の洪水（河川の整備水準を超える超過洪水）や津波の遡上、異常濁水などの対処法を盛り込み、人材育成も含めた継続性の高い教育プログラムを開発し実践する必要性を強く考えさせられました。

2. 河川環境教育の取り組み

河川法の改正を受けて平成 10 年に河川審議会の「川に学ぶ小委員会」からの『川に学ぶ』社会をめざしての報告に基づき、当財団は、川や水辺を活用した環境学習や体験活動（いわゆる河川環境教育）の普及・推進を図るための調査・研究並びに学習プログラムの開発・実践などに取り組んできました。

特に、国土交通省・文部科学省・環境省の連携施策として平成 11 年度にスタートした『子どもの水辺再発見プロジェクト』の推進拠点として、当財団内に「子どもの水

辺サポートセンター」が設置された平成 14 年度以降、次世代を担う子どもたちに対する河川環境教育に関する調査・研究並びに普及・展開を精力的に進めてきています。

具体的には、全国各地における河川環境教育の普及方策や活性化方策に向けた検討業務や子どもたちに対する教材開発や教育効果の自主研究事業などがあります。

これまでの全国各地での調査・検討業務や自主研究事業などを通して、子どもたちの「生きる力」に必要な感性が最も育まれる小学校時代に環境学習や体験活動を実践することが重要であるとの認識（表-1 水辺体験活動における感性に関する研究参照）から、本年 2 月に小学校現場でも使いやすいように教育関係者等の指導・協力を受け「川を活かした体験型学習プログラム」（本財団ニュース：《出版案内》川を活かした体験型学習プログラムを参照）をまとめ、発刊したところです。

3. 河川水難事故防止に向けた安全な河川利用の啓発

「川に学ぶ」社会をめざすには、次世代を担う子どもたちや若者を川や水辺に誘い、環境学習や体験活動の取り組みを実践・継続することが重要です。しかし、川は自然そのものであり、水が流れていることでさまざまなリスクが内在しています。

当財団では、河川環境教育の推進を図るとともに、安全に楽しく川を利活用してもらうために内在するさまざまなリスクを認識し、リスクから回避できる判断力や排除したり低減する知識や技術・装備等、安全な河川利用のための啓発活動にも取り組んでいます。

また、平成 11 年の玄倉川、平成 18 年の酒匂川・富並川、平成 20 年の都賀川における痛ましい水難事故後には、内在する河川のリスクがあらためて注目され、このような水難事故を防止するための広範な対策についての調査・検討業務においても、財団の有する調査研究実績や収集整理したデータの分析結果が生かされています。

河川水難事故防止に向けた安全な河川利用の啓発に

表-1 水辺体験活動における感性に関する研究

感性の種類	着目したことばの項目数			気付きの変容が見られた児童の人数		
	体験前の平均	体験後の平均	育成結果	育成された	育成されていない	育成結果
知的好奇心に関する感性	0.261	0.184	×	50	17	○
生命感や自然を感じる感性	0.185	0.154	×	9	58	×
美しさを感じる感性	0.815	0.692	×	55	12	○
想像に関する感性	2.40	6.00	○	27	39	×

※平成 19 年～21 年の 3 カ年で、広島大学角屋研究室と共同で海田東小学校の 4・6 年生を対象とした川の流れ・E ポート体験等の調査・研究結果

※「知的好奇心に関する感性」、「美しさを感じる感性」、「想像に関する感性」に対して効果があった。

向けた具体的な取り組みとして、「安全な川遊びのために」のDVDを制作・配布、「水辺の安全ハンドブック」の全面改訂版の発刊、「全国の水難事故マップ」のホームページでの公表に併せ新たに携帯モバイル版の公表を行っています。（本財団ニュース：〈報告事項〉全国水難事故マップのデータ追加更新と携帯電話モバイル版の運用開始、〈出版案内〉水辺の安全ハンドブック（改訂版）の発刊、DVD「安全な川遊びのために」の制作・配布を参照）

さらに、安全に楽しく川や水辺で学び・遊べる川の指導者を育成するための「川の指導者養成講習会」、「水辺のリスクマネジメント講座」及び「水辺のレスキュー講習会」など幅広い取り組みを行っています。



写真-1 ストップ水難事故～急な増水に備えて！～のリーフレット



写真-2 水辺のレスキュー講習会（木津川）

4. 洪水などの防災教育の取り組み

我が国の河川では、治水対策の進捗とともに大規模な洪水災害が大幅に減少している一方で、局地的な豪雨などによる中小河川での洪水災害は毎年のように発生し、多くの人々が被害に遭遇しています。洪水などの災害から身を守り（自助）、さらに身近な人との助け合い（共助）には、子どものうちから学び、身につけておくことが重要です。このことは洪水以外の地震や津波などの災害対策にも共通するものと考えられます。

当財団では、子どもたちが洪水などの水防災に関心を持ち、洪水発生時に身を守る力を身につけてもらうための教材（マイハザードマップづくり等の教育プログラム）の調査・研究と開発も行っております。これらの教材は、多様な自然を有する川での環境学習や体験活動のプログラムと組み合わせて実施することで、子どもたちの関心や理解につながり、自分たちの生活する地域特性や歴史を学び、郷土愛を育むことにつながります。

しかし、このたび未曾有の大災害を引き起こした東日本大震災は、想定を超えた津波と言う自然の驚異をあらためて認識させられました。想定内の洪水対応のみなら

ず、頻度は低いものの想定を超える大規模な洪水災害にも対処していく力を、水防災教育によっていかに継続的に育んでいくかといった新たな課題に関係機関と連携して取り組む時が来ていると考えています。



写真-3 水防災教育素材集 写真-4 防災学習マニュアル

5. 河川環境教育ならびに水防災教育の推進に必要な人材育成

(1) プロジェクトWETの指導者養成

プロジェクトWET（Water Education for Teachers）は、子どもたち（小学生から高校生を対象）が水や水資源・水防災に対する認識・知識・理解を深め、責任感を促すことを目標としてアメリカで開発された教育プログラムです。「水」に関する知識を単に「教える」のではなく、子どもたちの「気づき」を重視し、また楽しく学べるようにアクティビティを伴った構成となっています。

当財団は、平成15年にアメリカのモンタナ州に本部があるプロジェクトWETインターナショナルとライセンス契約を締結し、日本で唯一の普及啓発機関「プロジェクトWETジャパン」として活動しています。

プロジェクトWETのプログラムを利用するためには、まずエドゥケーター養成のための講習会を修了する必要があります。エドゥケーター養成の講習会を開催できるファシリテーターは、エドゥケーターの資格と指導



写真-5 アクティビティ「青い惑星」

図-1 普及ネットワーク

実績を有し、コーディネーター（プロジェクト WET ジャパンの代表）が開催するファシリテーター養成講習会を修了する必要があります。

これまでに、日本国内での数多くの講習会が実施され、エデュケーター数は5,300名を超え、ファシリテーター数は225名となっております。

（2）川の指導者養成

川や水辺をフィールドとした環境学習や体験活動を実践するには、安全に楽しく指導できる知識や技術を有する指導者が不可欠です。特に子どもたちの体験活動には、教育的な効果を見据えたプログラム構成や内容が重要となります。

当財団は、NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会（通称：RAC）と連携し、川の指導者養成を実践しています。平成13年度以降これまでに財団主催の川の指導者（RACリーダー、RACインストラクター1種）養成講習会を終了した人数は、河川管理者等を含め延500名余りとなります。

今後とも RAC と連携し、全国の河川に指導者が存在し、「川に学ぶ」社会の構築をめざし河川の環境教育と防災教育の取り組みが恒常化できるような仕組みづくりに取組んでいきたいと考えています。



写真-6 RAC インストラクター1種養成講習会 写真



写真-7 RAC リーダー養成講習を兼ねた職員研修 写真

（3）次世代を担うオピニオンリーダーの育成

「川に学ぶ」社会を構築するには、歴史的にも深いかわりを持ってきた人と川との関係を復活させ、次世代に引き継いでいくことが重要と考えています。川での体験を通じた環境教育については、小学校での総合的な学習の時間などで取り組まれている事例があります。中学校や高等学校では、クラブ活動や地域の市民団体活動に個人的に参加している事例があるものの、学校として取り組んでいるような事例は非常に少ないのが実情です。

次世代を担う現在の子どもたちが、川の環境や水防災に対する関心を継続し、基本的な知識や認識をもった大人に成長し、地域や社会のオピニオンリーダーとして活動できる人材育成が強く望まれています。

当財団では、平成15年3月に日本で開催された「第3回世界水フォーラム」の主要セッションとして開催された「第1回世界子ども水フォーラム」の事務局として運営に携わって以来、身近な河川の自然環境や洪水や渇水などの水問題を議論し交流する機会として、毎年度国内の中・高校生を対象とした世界子ども水フォーラム・フォローアップ大会を開催し、本年度で9回目となります。この間、3年に一度開催される世界水フォーラムの主要セッションとなっている世界子ども水フォーラム（メキシコとイスタンブール）に、日本の子どもたちの代表を派遣してきました。

本年度は、東京で開催し、来年3月フランス・マルセイユで開催される第6回世界水フォーラムに派遣する子どもたちの選考を兼ねています。（本財団ニュース：〈お知らせ・募集〉「第9回世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 東京 2011」の開催を参照）

これまでの大会を通して、大会に参加し大学生となったOBが子どもたちの分科会のファシリテーターや大会運営スタッフとして積極的に協力支援してくれる仕組みが定着し、人材育成の手ごたえを実感するとともに、将来のオピニオンリーダーとしての活動に大いに期待しているところです。



写真-8 第8回大会（北海道洞爺町）での分科会の様子

6. 「子どもの水辺サポートセンター」を中心とした今後の展開

（1）「『子どもの水辺』再発見プロジェクト」の推進拠点としての強化

当財団内に設置されている「子どもの水辺サポートセンター」は、国土交通省・文部科学省・環境省の3省連携施策「『子どもの水辺』再発見プロジェクト」の推進拠点として、川や水辺をフィールドとした子どもたちの環境学習や体験活動のための調査研究やさまざまな支援・活動を推進してきました。

平成14年度に設置され本年度で10年目となる子どもの水辺サポートセンターは、河川の環境教育や防災教育

内帯－外帯)から微生物場までの階層的な空間スケールで河相の特徴を捉え、その河川管理のあり方を提案することを目指しておられます。

今回は、河相形成機構の把握に向けて、関東地方の一級水系を中心とした現地調査結果の途中経過を講演していただきました。(知花先生、ありがとうございます。)

ご講演の概要は以下のとおりです。

■上流域

- ・山地河川で河床勾配が1/40を上回るとステッププール構造が見られる。中でも急勾配区間には礫段が、緩勾配区間には礫列が形成されるが、勾配の割に礫径が小さいとカスケード型になり、一部岩盤が露出し、礫径は勾配で規定される。
- ・大粒径の材料は岩質の風化特性と対応するが、細粒分は断層などの状況次第で、時空間的なハラツキが大きい。よって、ダム下流のアーマー化のしやすさは岩質と対応するが、河床が巨礫のみとなるか否かは、ステッププールの洪滞非洪滞の違いと同様に周辺の土砂生産状況次第である。

■中下流域

- ・中小規模の扇状地では、岩質の風化特性と対応した河相が見られる。大河川や土砂生産の活発な扇状地では、粒径が連続的で、河相は中古生界のものに比較的類似する。
- ・谷底平野を流れる河川では、表層に存在する関東ローム層が水循環に大きく影響を及ぼす。河相は、比較的上流で河床勾配や河道線形の影響を受けるものの、下流では直線化されており、地質の類似する河川間の違いは見受けられにくい。なお、上流域の河床勾配は河道線形の変更の効果が大きく、河道線形の変更は都市化のタイミングと河川改修のタイミングのどちらが先かで大きく異なる。
- ・蛇行原を流れる河川では、縦断勾配・蛇行のしやすさ・川幅水深比のそれぞれが、火山岩流域、堆積岩流域、及び扇状地～蛇行原の幅によって異なる。河岸の耐侵食力と河床の安定度のバランスがこれらの間で異なるためである。



(担当：研究第3部)

2. 「第4回アドバイザー委員会」の開催

平成 23年 3月 25日、第4回研究アドバイザー委員会を開催しました。今回の委員会では、平成 22年度研究テーマ「東海地域における強雨発生機構の理解と将来予測」について、研究内容および現在の進捗状況を確認するとともに、今後の方向性（既存モデル用いた検証実験）を議論しました。

また、平成 23年度研究テーマの募集については、一次、二次審査を受け、7月からスタートする予定としています。



第4回研究アドバイザー委員会

(担当：名古屋事務所)

3. 河川セミナー「河川の土砂流出と底生生物に関する懇話会」の開催

～矢作川をフィールドとして～

平成 23年 2月 18日、愛知県産業労働センター「ウイंकあいち」におきまして、名古屋事務所の調査・研究事業の一環として河川セミナーを開催しました。

この河川セミナーは、平成 21年度研究テーマ「土砂生産特性に着目した河床生物生息場環境の形成機構の解明」を題材とし、矢作川における河川の土砂と底生生物の生息環境について、研究者 4名と参加者 36名が一体となって議論し、よりよい河川環境を将来世代に残していくための技術的課題について考えていくことを目的として開催しました。



河川の土砂流出と底生生物に関する懇話会

(担当：名古屋事務所)

4. 「河川塾」報告～第6期塾生の旅立ち～

平成 23 年 4 月 15 日に第 6 期河川塾初等科の修了式が行われ、塾長である当財団河川環境総合研究所の山本晃一所長から、受講生に修了証書が授与されました。

河川塾初等科は、河川に対する基礎的な知見の向上、河道特性及び河川環境特性を読み解く能力の向上を目的に、財団の研究職員及び協力会社職員の技術研鑽を目指して開講しています。第 6 期は、15 人の塾生を対象に、平成 22 年 6 月～平成 23 年 4 月（平成 22 年 1 月～3 月は休止）までの 8 ヶ月間で、講義 20 回に現地見学会を合わせて計 21 回を開講しました。現地見学会では、川の特徴を実感するため、現地の実例を前にして、塾長の山本晃一から川の読み解き方の説明を受けます。第 6 期では静岡県安倍川・大井川・菊川を 2 日間かけてまわりました。

修了に当たっては、塾長から「河川塾で学んだことを基に、河川の特徴を読み解き、計画に活かすことができる技術者になって下さい。」とのお話がありました。また、塾生からは「河川塾を通じて、川の変遷とその要因について明らかにすることは難しいが、非常に重要だと感じた。」という感想が聞かれました。

なお、第 7 期の河川塾初等科が、平成 23 年 5 月より開講しています。今後、第 7 期の活動についてもご報告していく予定です。



(担当：研究第 3 部)

5. 小冊子「川の水：第 14 号」の発行

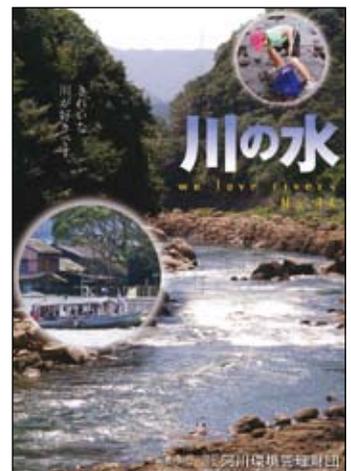
当冊子は、中・高・大学生並びに一般の人を対象にして、河川の水環境の状況、豊かで親しみのもてる水環境づくりの施策、水質浄化事業や住民の水質改善への取り組み事例の紹介、水質保全に関する主要なテーマの解説等を通じて、水環境への理解と意識の向上・啓発を図ることを目的として平成 9 年度から作成・発行しております。

このたび作成した第 14 号では、「新しい川づくり最前線：住民が主役の川づくり」をテーマにとりあげました。

河川は、地域の暮らしの中で、洪水対策や河川利用や水資源の利用などにおいて人々と密接な関係があり、地域の文化の形成に深く関与してきました。河川がとても汚れ、地域の人々と川のつながりが希薄になった時期もありました。しかし、最近では河川水質の改善とともに、川に憩いや自然を求めて人が再び川に近づくようになり、地域の文化を生かした川づくりの事例が増えてきました。全国には、地域で力をあわせ、このような川づくりに取り組んでいる人たちがたくさんいます。

これらの人たちの活動を広く情報提供することにより、地域における水の文化の発見や、川と地域の新しい関係づくり、さらには皆様の幅広い活動に少しでもお役に立てればと思っています。

本冊子は、全国の中・高・大学、教育委員会、自治体、関係省庁等に無償で配布しています。



(担当：研究第 2 部)

報告事項 2 (河川環境学習関係)

1. 全国水難事故マップのデータ追加更新と携帯電話モバイル版の運用開始

当財団の「子どもの水辺サポートセンター」では、平成 14 年の設立以降、全国の川や水辺での環境学習や体験活動の普及・促進を図るために、さまざまな取り組みや支援を行っています。川や水辺には、さまざまな危険が内在しており、楽しく遊び、学ぶためには安全を最優

先した取り組みが不可欠です。

そこで、水難事故を防ぎ安全な河川利用に向けた啓発を行うために、全国の川で発生している水難事故事例を新聞記事やインターネットニュースから独自に収集・分析してきました。平成 21 年の 7 月には、平成 15 年から 20 年の 6 年間に収集した水難事故の発生箇所と事故概要を整理した「全国水難事故マップ」としてホームページで公開し、その後の年次更新により、これまでに公開

した事例数は約 770 件になります。

「全国の水難事故マップ」は公開後、大きな反響を呼び、NHK などのマスコミにも取り上げられ、水難事故防止に向けた取り組みにつながったのではないかと期待しています。

しかしながら警察庁統計によると、平成 22 年の夏期（6～8 月）において河川では 291 件の水難事故が発生しており、前年、前々年から 2 年連続で水難事故の発生件数が急増している状況です。

このような状況のなか、河川利用者に対してより効果的に啓発を行い、河川現地で水難事故を防ぐために、携帯電話対応のモバイルサイト「全国の水難事故マップ モバイル」を開設しました。

「全国の水難事故マップ モバイル」には、水難事故事例の検索機能として GPS 検索機能を付加し、現在地周辺での水難事故事例が確認できるようになりました。

これらの機能により、河川利用者が現地で携帯電話を使ってその場所の水難事故の状況等（過去にその場所で、どんな水難事故があったのか）を確認し、その場所で起こった水難事故を教訓に、自発的に安全な河川利用を行えるようになることを期待しています。

また、本年も昨年に引き続き、平成 22 年に収集した約 180 件の水難事故事例を、7 月はじめの「河川水難事故防止週間」に合わせ、更新する予定です。

「全国の水難事故マップ モバイル」へは、下の QR コードからアクセスしてください。



全国の水難事故マップモバイル（表示例）



QR コード

（担当：研究第 1 部河川環境教育班）

2. 「平成 22 年度 川に学ぶ全国事例発表会」の開催

当財団の子どもの水辺サポートセンターでは、河川整備基金助成事業により全国の小・中・高等学校や市民団体等が、川や水辺をフィールドとした環境学習や体験活動の実施事例の中から他の模範となるような事例を毎年度抽出し、川に学ぶ全国事例発表会での発表をしていた

だいております。

第 9 回となる「平成 22 年度川に学ぶ全国事例発表会」は、平成 23 年 1 月 28 日（金）当財団会議室を会場として、平成 21 年度助成事業の中から総合的な学習の時間等の部門を 5 事例、国民的啓発運動部門を 5 事例を抽出し、発表していただきました。概要は、子どもの水辺サポートセンターのホームページで公表しています。

（<http://www.mizube-support-center.org/info/2010/h22jirei-report.pdf>）



発表者全員と参加者を交えた活発な意見交換会

（担当：研究第 1 部河川環境教育班）

3. 「第 2 回プロジェクト WET・ワイルド 全国大会」の開催

水に関する教育プログラムとしてアメリカで開発された「プロジェクト WET」は、当財団がプロジェクト WET ジャパンとして国内での普及・展開を推進しています。

同様に、野生生物に関する教育プログラムとしてアメリカで開発された「プロジェクト・ワイルド」については、(財)公園緑地管理財団が事務局として国内での普及・展開を推進しています。

プロジェクト WET としては 2 回目となる全国大会を平成 23 年 2 月 5・6 日に東京都三鷹市のボーイスカウト会館にて開催しました。

今回は、のべ 64 名（事務局・スタッフを合わせて 76



プロジェクト WET アクティビティ実施例
「塵もつもれば国際河川版（塵もつもれば&水差しをまわそう）」

名)の方にご参加いただき、北は北海道、南は沖縄の方まで全国各地からお越しいただきました。今年度からプロジェクト WET& ワイルドの有資格者に限らず、一般の方にもご参加いただき、より沢山の方々との交流を深めることができる大会となりました。

プロジェクト・ワイルドと合同での開催も今回で2回目とのこともあり、アクティビティ事例紹介を WET・ワイルドの単体だけではなく、複合的な事例紹介を募集し、どちらのアクティビティも体験できる内容となりました。
<http://www.project-wet.jp/report/20110205-06wildwet.html>
 (担当：研究第1部河川環境教育班)

4.「第10回プロジェクト WETファシリテーター講習会」の開催

講習会概要

- (1) 開催日時：平成 23 年 1 月 15 日(土)～16 日(日)
 - (2) 開催場所：河川環境管理財団会議室(東京都中央区)
 - (3) 講師：プロジェクト WET ジャパン
 コーディネーター 宮尾 博一
 ファシリテーター 建部 彰一
 - (4) 受講人数：18 名(フォローアップ参加者 3 名を含む)
- 講習会の様子

当財団は、平成 15 年度から「プロジェクト WET ジャパン」として、子どもたちが水について楽しく学び、考えるようにつくられた教育プログラムである「プロジェクト WET (Water Education for Teachers)」の普及・展開を図っています。

今回第 10 回目となるファシリテーター講習会は、前年 10 月に名古屋で開催した講習会同様「新アクティビティ」を多く入れ込んだ講習会となりました。

共同講師には、平成 21 年度に約 1 年かけて取り組んできました「新アクティビティ集」編集・発刊ワーキンググループでご協力いただいた奈良県の建部彰一氏をお招きしました。建部氏は同ワーキンググループの「水質チーム」をご担当された関係もあり、今回の講習会では「水質」を中心としたアクティビティを担当いただきました。

はじめに宮尾コーディネーターが「水に関する職業」をアイスブレイクとしてアレンジして実施し、水源から各家庭を経て河口に水が利用されながら移動していくプロセスを様々な職業になってもらいながら、それぞれの自己紹介を交えて実施しました。その他「太古の水」も 46 億年という長い地球の歴史に思いをはせながら現在の水利用について考えました。

建部氏からは新アクティビティ集の「水質」部門である「ある時点のスナップショット」を用いて「流域の水質の分析・比較」を行い、同じく同部門の新アクティビティ「ルックスがすべてじゃない」を寸劇を取り入れて

実施してもらいました。

ピアティーチングでは「8人がひとりのために、ひとりがみんなのために」や新アクティビティの「コミュニティを比較しよう」の他、「お腹痛くない?」と「エネルギーギッシュな水」をメニューに取り入れ、大いに盛り上がりました。

意見交換の場では、低学年向けにアクティビティを実施する際の注意点や工夫すべき点、プロジェクト WET の普及・活動の機会の確保やメリット付けの必要性など様々な意見が出され、今後のプロジェクト WET の展開方法について大きなヒントを得ることができました。



実施アクティビティの例「ある時点のスナップショット」

色紙を拾う際にセロファンのサングラスをかけるとどうなるか、「川の透明度が低下した」という設定等幼年向けのアレンジを加え、様々な環境要因の変化を楽しく体験してもらいました。

(担当：研究第1部河川環境教育班)

5. DVD「安全な川遊びのために」の制作・配布

当財団では、「子どもの水辺サポートセンター」の活動を通して、「川に学ぶ」社会をめざし、次世代を担う子どもたちを中心に、豊かで多様な自然を有する川や水辺を活用した環境学習や体験活動の推進に取り組んでいます。

しかし、川や水辺にはさまざまな危険が内在しており、毎年のように起こる痛ましい水難事故の事例を分析すると、川に内在する危険を予知・予見する知識や判断力を身につけ、必要最小限の対応をしていけば防止できたのではないかと考えられる事故も多く見受けられます。

特に、川に内在する危険として、水の流れには、地形や川の形状とともに流量の変化等から見た目には分からない複雑な流れが存在し、この複雑な流れに遭遇し、事故につながる事例が多く見受けられます。

このため、日本宝くじ協会の助成を受けて、水の流れ等を映像で見て、より正しい理解と認識を得るための DVD「安全な川遊びのために」を制作し、多くの子どもたちや河川利用者に活用していただくために、全国の学校や川で活動する市民団体等に配布しました。

DVDの内容は、「子ども向け」(第1部)と「指導者向け」(第2部)の2部構成になっています。川へ出かける前には是非ご覧下さい。



DVD「安全な川遊びのために」は無料で配布しております。詳しい申込方法は、河川環境管理財団ホームページをご覧ください。また、子どもの水辺サポートセンターホームページからは、映像データをダウンロード、または閲覧することもできます。

河川環境管理財団ホームページ：

<http://www.kasen.or.jp/work/result05.html>

子どもの水辺サポートセンターホームページ：

<http://www.mizube-support-center.org/contents/dvd.html>

(担当：研究第1部河川環境教育班)

6. 体験施設における河川環境教育への取り組み

平成17年度から平成22年度までの6年間、国土交通省中部地方整備局木曾川上流河川事務所より受託した

「国土交通省水辺共生体験館」の管理運営業務におきまして、来館者と接する中で得られたニーズに対応するために試行錯誤を繰り返しながら、特に「初めて河川に触れる子供たちに関心のある魚類や動植物を題材として、気軽に参加いただくことにより、河川の環境に目を向けさせていくプログラム」を企画実施してきました。

その効果については、プログラムへの参加者数やアンケートの結果をみると、河川環境教育の導入部としての役割が果たすことができましたと言えます。

今後は、ここで得られたノウハウを生かした河川環境教育事業が展開できればと考えています。

ザリガニをのぞいてみよう



魚のモビール作り

(担当：名古屋事務所)

公園・施設管理コーナー

1. 多摩川・諏訪野球場をリニューアルオープン～より快適な利用を～

当財団が管理します多摩川の健康公園（諏訪野球場（第1、第2））をより快適に利用してもらえるよう、野球場の内・外野を含め附属施設をリニューアルしました。

今回のリニューアルは、利用者のニーズに十分対応するため、少年野球の硬式ボール使用に対応できる防球ネットの設置も行い、将来に大きな夢を抱く野球少年や一般の方々も安全で快適に利用できる新たな諏訪野球場として生まれ変わりました。

今後も多くの方々が、より快適に河川健康公園を利用していただけるようにするため、公園の利便性・快適性の向上に向けた公園内施設の充実を図っていきたく思います。なお、この野球場は宝くじ助成事業により整備・

新設されたものです。

【施設案内】

川崎市高津区諏訪～北見方地先（多摩川右岸）



諏訪第2野球場

(担当：東京事務所)

2. 平成 22年度河川美化・緑化事業 (植樹等)の実施

社団法人ゴルファーの緑化促進協会と連携して、ゴルファーの皆様の協力金によって植樹等を推進しています。

平成 22 年度の河川美化・緑化事業は、約 2,900 万円の事業費によって、北海道、関東、近畿、四国、九州地方の河川公園などにおいて、ブナノキ、アルプスオトメ、ナナカマド、ハナミズキ、ウメ、クスギ、ボックスウッド、ハクチョウゲ、キョウチクトウ、ヤマボウシ、ドウダンツツジなどを植樹しました。



吉野川河川敷公園 (徳島県つるぎ町)

(担当：企画調整部)

3. 第 1 回 なにわ淀川ハーフマラソン 大会」(大阪)の開催

淀川河川公園管理運営業務を受託している大阪事務所は公園の利用促進マナーアップ向上、河川愛護の啓蒙に資する為に多様な行催事を行っています。国民の健康増進を目的にマラソン、野球、グランドゴルフ、エコドライブ等の大会を主催、共催しイベント誘致に努力しています。写真は4月3日に、西中島地区で開催したハーフマラソン大会の様です。



(担当：大阪事務所)

河川整備基金コーナー

1. 助成事業23年度申請を振り返って

平成 22 年度募集要項から以下の点を修正し、平成 23 年度河川整備基金助成事業の募集を行いました。

調査・試験・研究部門

- ①従来の「重点的助成」を「共同的研究助成」に名称変更しました。
- ②教育関係者を対象として、テーマ番号 1261「小中高等学校の総合的な学習、教科学習における河川を題材とした教育プログラムの策定及び実践」を新に設定しました。
- ③指定課題助成の条件を満たすことができない研究者が一般的助成で申請することができるようにテーマ番号 1271「指定課題と同一のテーマ」を新に設定しました。
- ④大学等の研究者における一般的助成で、大学事務局に委任経理を依頼する場合は、全額前払いを可能としました。(従来は 100 万円を超える金額は前払いができませんでした)
- ⑤大学の「間接費 (いわゆるオーバーヘッド)」は、助成事業費に含まれていないことを明記しました。

国民的啓発運動部門

- ①ほぼ同じ内容で 5 年以上継続的に採択されている事業

については、申請書とは別に引き続き継続的な実施が必要である理由や普及啓発効果の実例等がわかる資料の提出を求め、提出された資料をもとに助成事業の審査を行うことを明記しました。

- ②助成事業に採択された場合は、現地に入って帳簿等を確認させていただくことがある旨を明記しました。

(1) 申請件数について

平成 23 年度の申請件数は、過年度継続のものを除き平成 22 年度の 745 件から 757 件と 12 件増加しました。

調査・試験・研究部門では、平成 22 年度の 345 件から 364 件と 19 件増加しました。これは、「教育プログラムの策定及び実践」や「指定課題助成と同一のテーマ」を新規に設定したこと、昨年度以上の数の関係機関のホームページに募集案内の掲載を依頼するなど募集に関する広報をより活性化させたことによるものと考えています。

国民的啓発運動部門では、申請件数が昨年度から若干減少しました。なお、テーマ番号 3121 (小中高等学校の総合的な学習の時間における河川を題材とした活動)の申請件数は、平成 22 年度の 120 件から平成 23 年度は 123 件と若干増加しました。

次年度も引き続き、募集案内に関する積極的な広報活

動を展開していきたいと考えています。

(2) 採択件数について

最近の市場金利の低下に伴って、整備基金の運用益が減少しており、助成事業費も減少しておりますが、昨年度の繰越金を有効活用するなどにより対処しています。

平成 23 年度の採択件数は、新規分で 403 件となり、平成 22 年度と比較して 9 件増加しております。

(3) 申請時の書類審査から

- ①大学機関からの一部の申請において、助成事業では認められていない管理費等の計上がありました。
- ②部門及びテーマごとに定められている助成限度額を超えて申請している案件がありました。
- ③EXCEL シートにより申請書を作成することになっていますが、PDF にして申請書を送付するケースがありました。

(担当：研究第 1 部基金班)

2. 河川技術研修会開催報告について

(1) 目的

河川関係業務を担当する国土交通省、都道府県、市町村等の職員に対して今後の事業実施に必要な実務的な知識を習得させ、職員の資質の向上を図り、河川管理業務や河川事業の強化・充実に役立てることを目的としています。

なお、本研修会は、河川整備基金の自主事業として実施しております。

(2) 背景

従来から、河川技術に関する研修は、中央では国土交通大学校における研修や(社)日本河川協会の「水防研修・河川管理研修・河川講習会」等の研修、地方では国交省職員向けの地方整備局単位の研修があります。

しかし、中央での研修は、全国版として実施しており、河川に関わる話題が全国的となり、地域の特徴が出せず、また上京する必要があり、予算や業務状況等の制約により各地から容易に参加できない等の問題があります。

このような背景に鑑み、平成 17 年度から各地域の国土交通省地方整備局・都道府県・市町村等の河川技術者の技術力向上を図るため、各地域が抱えている課題等を取り入れた地域版として組織横断的な河川技術研修を実施することとしたものです。

(3) 実施方法

研修のテーマは、研修受講予定者等からの意見を参考に毎回決定しています。

また、講義方式に加えて、国、都道府県、市町村の職員等が双方向でグループ討議を行う参加型の研修会となっていることが特徴です。

(4) 平成 22 年度河川技術研修会の実施状況

別表のとおり

(5) 平成 23 年度の予定

平成 23 年度からは、助成事業で実施することになりました。平成 23 年度は、東北、北陸、近畿で採択されています。

平成 22 年度河川技術者研修会の実施状況

	北海道	四国	近畿	中国
実施日	H22.11.9～10	H22.11.29～30	H23.1.20～21	H23.2.2～3
会場	教育文化会館 /札幌市中央区	四国地方整備局及び サンポート高松/高松市	近畿地方整備局別館及び追手門学 院大阪城スクエア/大阪市中央区	広島合同庁舎 2・3・4 号館 /広島市
研修テーマ	これからの河川管理	これからの河川管理を考える	地球温暖化に伴う気候変化への対応	いまの河川管理を考える
参加者	①研修生 66 名 ②聴講生 138 名	①研修生 89 名 ②聴講生 128 名	①研修生 69 名 ②聴講生 133 名	①研修生 97 名 ②聴講生 103 名
特別講演等	<input type="checkbox"/> 地域づくりと合意形成 東京工業大学大学院 教授 桑子敏雄 <input type="checkbox"/> 災害時にわかりやすい情報発信をするために 読売新聞大阪本社編集局科学部 川西 勝 <input type="checkbox"/> 地域温暖化がもたらす北海道への影響 札幌管区気象台技術部 部長 吉田 隆 <input type="checkbox"/> 河川の管理について 河川環境管理財団 北海道研究所長 黒木幹男	<input type="checkbox"/> 洪水流と樹木管理 中央大学研究開発機構 教授 福岡捷二 <input type="checkbox"/> 統計学について 京都大学防災研究所 教授 賈 馨	<input type="checkbox"/> 佐用川水害に学ぶ局地豪雨災害の軽減方策について 神戸大学大学院 教授 道奥康治 <input type="checkbox"/> 気候変化への対応は河川技術の質の向上を求める 国土技術政策総合研究所 流域管理研究官 藤田光一 <input type="checkbox"/> 治水と環境を統合的に考えた川づくり 中央大学理工学部 教授 福岡捷二	<input type="checkbox"/> 中国地方の川と歴史 関東学院大学 名誉教授 宮村 忠 <input type="checkbox"/> 洪水災害と対策の変遷と危機管理 関西大学社会安全学部 学部長 河田恵昭 <input type="checkbox"/> 地域連携と合意形成 東京工業大学大学院 教授 桑子敏雄

(担当：研究第 1 部基金班)

出版案内

1. 「川を活かした体験型学習プログラム」の発刊

先の河川環境管理財団ニュース No.38 号でも予告しましたとおり、本年 2 月に「川を活かした体験型学習プログラム」を発刊しました。

本書は、小学生が川をフィールドとして、安全に楽しく学び遊ぶさまざまな体験活動の指導書として、小学校の学校現場でも利用できるように作成したものです。本書の編成にあたっては、角屋重樹広島大学大学院教育学研究科教授（現在、文部科学省国立教育施策研究所教育課程研究センター基礎研究部長）を座長に、小学校長等の教育関係者で構成した「体験型学習プログラムの開発に関する研究会」において監修していただきました。

本書の構成は、まず小学校での体験活動の実践事例を紹介し、さらに、学校現場での実践の参考となるように 6 つの分野に関する 32 のプログラムをわかりやすく掲載しています（下記参照）。

- 序章 水辺体験学習と育成される力
- 1 章 体験学習としての川の魅力
- 2 章 各教科に関連した川を活かした体験学習の実践例（小学校 12 校）
- 3 章 川を活かした体験型学習プログラム
 - 3-1. 川や水を感じる
 - 3-2. 川や水辺の環境を調べる
 - 3-3. 川や水辺の生き物を調べる
 - 3-4. 環境保全・改善について



3-5. 洪水の怖さや防災について

3-6. 川と地域の歴史や文化について

4 章 体験型学習の支援体制等の関連資料

本書の販売は全国の書店にて、定価 2,310 円（税込）で行っておりますが、当財団に直接申し込み頂いた場合には（メール：msc@mizube-support-center.org）、2,000 円（税込・送料は別料金）で販売しております。

（担当：研究第 1 部河川環境教育班）

2. 「水辺の安全ハンドブック（改訂版）」の発刊

当財団では、川や水辺における環境学習や体験活動の河川環境教育の調査研究や水深に向けたさまざまな取り組みや支援を行っております。川や水辺をフィールドとした活動は安全が最優先とした啓発を図っている一方で、痛ましい水難事故が毎年発生している状況から、平成 12 年度に水難事故防止に向けた啓発資料として「水辺の安全ハンドブック」を作成し、その後、一部改定や増刷を繰り返し、全国の子どもたちをはじめ多くの河川利用者に活用していただいています。



本年 4 月、安全に楽しく河川を利用していただくために、内容を大幅に充実・改定し従来の 24 ページから 32 ページとして新たに発刊しました。販売価格は、1 冊 100 円（税込み）としました。申込方法は、当財団「子どもの水辺水辺サポートセンター」をご覧ください。

<http://www.mizube-support-center.org/contents/handbook.html>

（担当：研究第 1 部河川環境教育班）

お知らせ・募集

1. プロジェクト WET エducーター養成講習会

「河川環境教育の推進」を重点プロジェクトとして掲げている当財団にとって、職員が「河川環境教育」に関する各種の資格を有することは、今後の各種業務の推進、当財団の社会的評価の向上等においても重要であると考

え、様々な講習会を開催しています。

その一環として、河川や水に関する様々な事柄を分かりやすく、楽しく子どもたちに伝える事のできるツール「プロジェクト WET」の指導者養成講習会を当財団職員向けにも毎年開催しており、本年度も 6 月 18 日（土）に財団職員を講師として開催する予定です。



平成 22 年 6 月開催の財団職員向け
エドゥケーター養成講習会の様子

(担当：研究第 1 部河川環境教育班)

2. 川の指導者 (RAC リーダー) 養成講習会

「川に学ぶ」社会をめざし、次世代を担う子どもたちを川や水辺に誘い安全に楽しく環境学習や体験活動を実践・普及していくためには、川や水辺に内在する危険を正しく理解し伝えられる知識やスキルを身に付けた川の指導者が不可欠です。

当財団としては、河川環境教育の普及・推進を図る一環として、本年度も本格的な水辺での活動が行われる夏前に、川の指導者養成講習会を開催します。

概要は、下記のとおりとなります。

1. 日時 平成 23 年 6 月 17 日 (金) 及び 6 月 24 日 (金) ~ 26 日 (日)
2. 場所 日本橋消防署、財団会議室、荒川上流 (長瀨付近)
3. 内容 NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会 (通称：RAC) のリーダー養成講座



RAC リーダー養成講習会 (スローロープによる救助技術講習)

(担当：研究第 1 部河川環境教育班)

3. 河川美化・緑化助成事業(植樹等) - 募集 -

公園・施設管理コーナーで平成 22 年度の事業報告いたしましたように、日本の国土を緑で美しくする運動のひとつとして当財団では、社団法人ゴルファーの緑化促進協会と連携して、ゴルファーの皆様の協力金によって植樹等を推進しています。

平成 23 年度の助成事業について、現在、応募条件などを記載した募集要項を整理しているところです。準備が整いましたら当財団のホームページに掲載いたします。

※当財団ホームページ：<http://www.kasen.or.jp/>

※募集期間 (予定)：7 月 1 日 (金) ~ 8 月 31 日 (水)

なお、昭和 61 年度から助成を実施してきました「河川美化・緑化調査研究助成」につきましては、平成 22 年度助成をもちまして終了とさせていただきますのでお知らせいたします。

(担当：企画調整部)

4. 「第 9 回 (財) 河川環境管理財団 研究発表会」の開催

当財団の研究成果を広く周知するために、下記のとおり研究発表会を開催します。研究発表のほか、講演として演題「東日本大震災にみる命の分岐点～今、求められる命を守る防災～」(群馬大大学院工学研究科教授片田敏孝氏)を予定しています。皆様の参加をお待ちしています。当財団ホームページに発表会プログラムを掲載しています。

期日：平成 23 年 7 月 21 日 (木) 13 時 ~ 17 時 30 分

場所：砂防会館 別館 1 階「淀・信濃」

千代田区平河町 2-7-5 TEL 03-3261-8386 (代表)

交通：地下鉄永田町駅 (有楽町線・半蔵門線・南北線)

4 番出口徒歩 1 分

問い合わせ 企画調整部 江幡・桑原

(担当：企画調整部)

5. 「第 9 回世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 東京 2011」の開催

私たちの生活に不可欠な「水」については、さまざまな問題を抱えており、地球規模の課題となっています。世界の水問題 (水不足、水質汚染、洪水、渇水、国際紛争、環境問題等) は、21 世紀になってさらに危機的状況を深めつつあります。

深刻化する世界の水問題を解決するために、行政・市民・学識者など、さまざまな分野の人たちが集まり、2003 年 3 月『第 3 回世界水フォーラム』が日本 (京都・

大阪・滋賀)で開催されました。

その中の主要な分科会のひとつとして第1回目の『世界子ども水フォーラム』が開かれました。第2回目はメキシコ(2006)、第3回目はトルコのイスタンブール(2009)で開催され、次回第4回はフランスのマルセイユ(2012.3)で開催される予定です。

「世界子ども水フォーラム」での経験や成果が継続したものとなることを期待し、さらに子どもたちのネットワークを広めていくことを目的として、毎年国内で『世界子ども水フォーラム・フォローアップ』が開催されています。

これまで2003年に広島、2004年に宮城、2005年に東京、2006年に丹沢、2007年に福岡、2008年に東京、2009年に岐阜、2010年に北海道で開催され、今年第9回目となる「世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 東京 2011」を開催します。

この大会では、中学生・高校生の皆さんに世界の水に関する諸問題や自分たちが行っている水に関する活動等についてお互いに議論をしていただく予定です。

開催日時：2011年8月2日(火)～4日(木)

開催場所：東京都渋谷区代々木

国立オリンピック記念青少年総合センター

主催：世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 東京 2011 実行委員会

共催：(財)河川環境管理財団子どもの水辺サポートセンター

後援：文部科学省、国土交通省、(社)ガールスカウト日本連盟、全日本中学校長会、日本水フォーラム、川に学ぶ体験活動協議会 他

参加者：中学生及び高校生など約30名

備考：「世界子ども水フォーラム・フォローアップ in 東京 2011」の参加者の中から、代表者数名を「第6回

世界水フォーラム(フランス、マルセイユ)」に派遣する予定です。

(担当：研究第1部河川環境教育班)

6. 「第11回川に学ぶ体験活動全国大会 in 鶴見川流域」の開催

川に学ぶ体験活動協議会(通称：RAC)は、全国の川に関わる活動を実践している市民団体等が集まり平成12年9月に設立されました。

平成13年度からは、RAC加盟団体や関係機関・関係者が年に1回、一堂に会して情報交換や交流の機会となる「川に学ぶ体験活動全国大会」を全国各地で開催しています。

11回目となる本年度は、横浜市、川崎市、町田市の都市部を流域とする都市型河川を代表する鶴見川流域を会場として開催されます。鶴見川は、各支川を含めた流域全体で川を活用した環境学習や体験活動が精力的に実践されており、これまでにない充実した大会が期待されます。

大会の概要は、下記のとおりです。

- 日時 平成23年9月17日(土)～19日(月)
- 会場 慶應義塾大学・日吉キャンパス、鶴見川流域センター他
- 開催概要
17日(土) ・開会式
・鶴見川での体験活動紹介及び流域現地調査・視察
18日(日) ・全国からの活動事例発表
・分科会及びパネルディスカッション
・基調講演
・全体会議
19日(月) ・エキスカージョン(鶴見川周辺の現地調査・視察)

(担当：研究第1部河川環境教育班)

編集発行  財団法人 河川環境管理財団

編集事務局 企画調整部 担当：朝堀 E-mail:asahori-ya@kasen.or.jp
江幡 E-mail:ebata-s@kasen.or.jp

本部 〒103-0001
東京都中央区日本橋小伝馬町11-9
住友生命日本橋小伝馬町ビル(2F,3F)
<http://www.kasen.or.jp/>
E-mail:info@kasen.or.jp

総務部 TEL 03-5847-8301 FAX 03-5847-8308
企画調整部 TEL 03-5847-8302 FAX 03-5847-8308
研究第一部 TEL 03-5847-8303 FAX 03-5847-8309
研究第二部 TEL 03-5847-8304 FAX 03-5847-8309
研究第三部 TEL 03-5847-8305 FAX 03-5847-8310
研究第四部 TEL 03-5847-8306 FAX 03-5847-8310
東京事務所 TEL 03-5847-8306 FAX 03-5847-8310
子どもの水辺サポートセンター TEL 03-5847-8307 FAX 03-5847-8314
<http://www.mizube-support-center.org/>
E-mail:msc@mizube-support-center.org

北海道事務所 〒060-0061
札幌市中央区南1条西7丁目16-2(岩倉ビル)
TEL 011-261-7951 FAX 011-261-7953
<http://www.kasen.or.jp/hokkaido/>
E-mail:info-h@hk.kasen.or.jp

名古屋事務所 〒450-0002
名古屋市中村区名駅4-3-10
TEL 052-565-1976 FAX 052-571-8627
<http://www.kasen.or.jp/nagoya/>
E-mail:info-n@nagoya.kasen.or.jp

近畿事務所 〒540-6591
大阪市中央区大手前1-7-31(OMMビル13F)
TEL 06-6942-2310 FAX 06-6942-2118
E-mail:info-o@osaka.kasen.or.jp

大阪事務所 〒570-0096
大阪府守口市外島町4-18(守口フィットネスリゾート内)
TEL 06-6994-0006 FAX 06-6994-0095
<http://www2.kasen.or.jp/>
E-mail:kohen@osakaj.kasen.or.jp